

Rip@Lip
成人向け



moonlight
Rip@Lip 2008



「はあっ！ あああっ！」
「ふふっ 亜美ちゃんでは、こんなに
いやらしいコだったんだね。」
帰宅中うさぎに呼ばれて家に上がった
亜美だったが、すでに敵の手中に
入っていた。
「うっ…うさぎちゃん！ これは敵の罠よ
…っ 目を覚まして！」
「？ 何言ってるのよお この人たちはうさぎに
いっぱい気持ちいいこと教えてくれたのよお？」
必死に訴える亜美だったが、うさぎは目を覚まさない。
ズンツと下から突き上げる衝撃と淫魔の瘴気で思考が
かすれてゆく。
「あはっ… 亜美ちゃんの下のお口ビクビク動いてる…
イキそう？ イっていいんだよ亜美ちゃん！」
「んんっ…くうううっ…」
ビクン！ と体をのけぞらせながら亜美は快楽の
瘴気に飲まれていくのだった…

13.0



ずちゃ

「はあっはあっ……また……イツちゃう……はあっっ！」
「もう……やめて……許して……」
どのくらい時間が経ったのだろうか。

淫魔に責め続けられ、甘味な昇天を繰り返して
それでもなお執拗に体を犯され続けている。

秘所を肉棒がこする度に体をビクリと震わせながらも
気力を振り絞って耐えてきた亜美もはや抵抗する
力も残っていない。

「ククッ……プリンセスだけでなく水星の
戦士まで手に入るとは……手土産には十分だな」
すでに淫魔の奴隷となつたうさぎと亜美を
見下ろし勝ち誇る。

「しかしこれだけ犯してもまだキュウキュウ
締め付けてきやがる……これはもっともっと
調教が必要だな……クククッ」

そう言う淫魔の攻めがよりいっそう激しくなり
二人を貫く。

「ひあああっ！はげし……すぎるよおおっ！」
「ふあああああっ！」

二人の苦悶の叫びとともに淫猥な宴は続くのだった。

ずちゃ





フフフ…この二人が
捕らえた月のプリンセスと
水星の戦士か…

はい…調教は私共に
お任せください…立派な
性奴隷にしてみせましょう

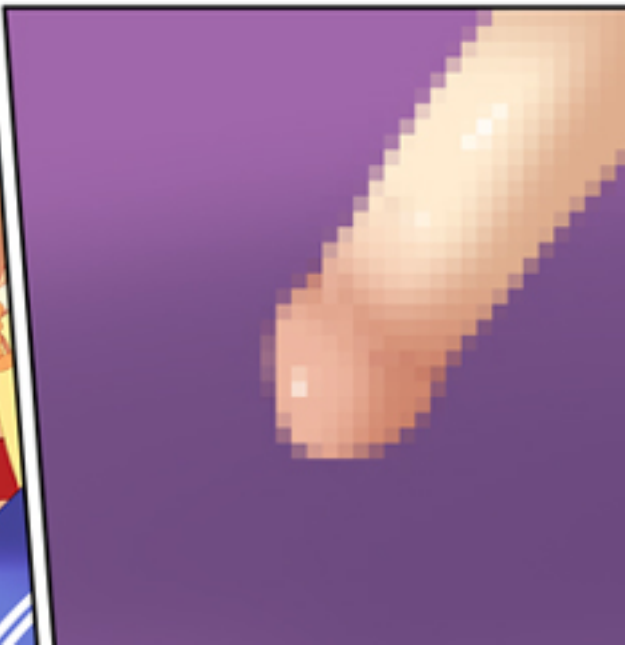


どうした?
女王様の前だからと
いって遠慮するな

……

さあお前たちの大好きな
肉棒だぞ…

ポロッ





ほうらお前の好きなものをくわせさせてやろう

ガクッ

ププ

ククッ

ククッ

んふっ はふっ

ソッソッ



お前もはやく快楽に溺れば楽になれるぞ……?

それとも無理やり挿れられたほうが喜ぶのか?

んんん

んんん

んあ……ふああ

ガクッ

ガクッ



ガキ

ガキ

ククッ……プリンセスのほうはこんな素直じゃないか……もう女王としての威厳もなくなったようだな

もう待てません……はやくコソに突っ込んでください……



そうらっ この汚れた肉棒を
しっかりそのいやらしい肉裂で
くわえ込むがいい！

んはあぁっ！

ぐろーん
ぐろーん
ぐろーん

はぁんっ

おっちゅっ

おっちゅっ

あっ……あー
興奮でビクビク
してきまうっっ

きゅぽ

びびゅっ

すっかり性の奴隷だなあ
プリンセス！
妖魔の仲間入りには
十分な素質だよ！





ふあああああつ！

イクっ イくらうううっ！

ビクッ
ビクッ

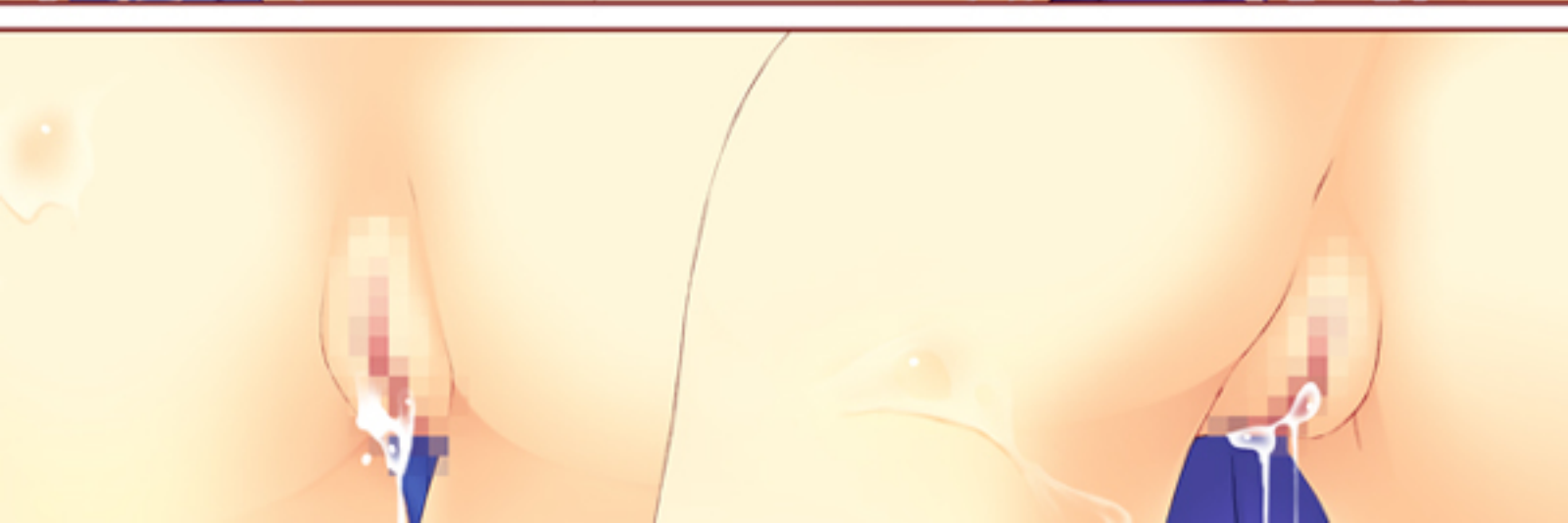
ドクンッ
ドクンッ

ドクンッ
ドクンッ

ククククッ…
犯され続けながら地球の
最後を見届けるが良い…

とろ

とろ









「ククッ…月のプリンセス様がいい格好だな」
妖魔による事件を聞きつけ、思ったとおり
沸いて出てきた下級の妖魔を退治し
気を抜いたのがいけなかった。潜んでいた複数の妖魔に
取り囲まれ、気がつくところの部屋へと連れ込まれていた。
「や…やだ…体が勝手に…っ」
目覚めたときにはすでに妖魔の術にかかってしまっていた
らしい。体は妖魔に操られ、自分の体をまさぐっている。
「いやああっ…まもちゃんにも見せたことないのにな」
はまだ男を知らない淡いピンクの秘所を自らあらわに
している自分を思うとジン…ッと体がほてってくる。

もじり

もじり

「いいねえ…その表情！正義の味方様のこんな
写真を街のみんなが見たらどう思うかなあ？」
「やっ…そんな…こと…っ！」
妖魔の凌辱的な台詞と、自分の卑猥な写真が
今後どう使われるかという意識が頭の中を
支配し、嫌でも秘所が湿ってきてしまっ
ていた。

ぴん

く

カニヤ

カニヤニヤ



グウグウグウグウ……
抵抗することもできず秘所に押し込まれた
ローターの音が部屋中に響き渡る。
先ほどからジクジクと潤う秘部は淡いピンクから
真っ赤に腫れ上がり、熱い蜜を滴り落としている。
「さあて、たっぷりご奉仕してもらおうか」
うさぎの目の前にズイツと2本の巨根が現れた。
「やああ……こんなことしたくないのに……」
自分の意思とは無関係に、差し出された淫靡な
肉棒へと手を伸ばす。

おきぎゃん♡

あーん

ムムムム

びん

びんびんびんびん

びん

「そっ……上手いじゃないか。これからお前を
可愛がってくれる肉棒なんだ、丁寧に扱って
もらわないと……」
今まで一度も男性器など見たこともないうさぎだったが
その言葉の意味は理解できた。しかし手は休むことなく
奉仕を続けている。
「クハハハッ……」ももうこんなにグシヨグシヨじゃないか」
ローターを持った妖魔の手がうさぎの秘所に触れた。
「きやふっ！ あああん！」
ビクン！と体を硬直させ悲鳴を上げるうさぎ。それでも肉棒を
握っている手は休まない。もう妖魔の術のせいなのか自分の意思なのかも
わからなくなっていた。

びん



ズブズブッ……

「ああっ んっ……やあああっ！」

体の隅々まで妖魔の膚となっている

うさぎは、あつさりとした硬い肉棒を

受け入れた。

「おおっ……すげえ締め付けだぜ……っ

さすがは月のプリンセス様だな」

耳に入ってくる自分の苦悶がさらに恥辱を

高め、刺激を受けている秘所はより一層

ヌルヌルと湿ってくる。

「へ……っ……のまま中に出してやろうか？

女王様が妖魔の子を孕むんだ」

「……っ」

その言葉にギョッとするうさぎだったが、一度

火照ってしまった体はもうどうしようもなかった。

「だ……だめ、だめええ！お願い、中にはだめえっ！」

極限まで高まった性感に耐えながら必死に許しを

請ううさぎだったが、次の瞬間、膣内の最深部に

熱いものが襲ってきた。

「……っふううああんっ！」

ちゅ

ちゅ

ぎゅぎゅ

だん

だん

ちゅちゅ

ちゅちゅ





「うふふっ……ここを触られると気持ちいいですかあ？」
肉棒の先端を優しくなでながら淫猥な台詞を吐くうさぎ。
もう妖魔の術にかかっているわけではない。
「ハハッ……もう完全に我らの奴隷だな……だがまだまだ
これからだ。もっともっと性に貪欲な戦士に調教してやるぞ」
勝ち誇った妖魔が高笑いする。
だがうさぎの耳にはその言葉も聞こえず、ただただ嬉しそうに
目の前の大小様々な肉棒をなで続けていた。
「はいっ……うさぎにもっとエッチなことばいしてくださってくださあいう……」
そこにはもう正義の味方としてはおろか月のプリンセスとしての
威厳は見られなかった。

かあ

ふん

ふん

ふん

ふん

ふん



「いやああっ……こんな格好……」
亜美の通っている塾で生徒たちを洗脳しようとする悪魔の陰謀を止めるため、マキキョーに変身し挑む亜美だったが、洗脳された生徒たちを人質にとられついに敵の洗脳に墮ちてしまった。「フッフッフ」毎日顔を合わせている生徒諸君にそんな痴態を披露するのはどんな気分かな？ 水星の戦士よ！
いつもは勉強に使っている机に大股開きで座らされ、自らスカートをめくり上げる亜美。
黒板には『保健の授業』と書かれていた。

くまっ

とろり

「うわ……これが亜美ちゃんのお○んこかあ……」
「す……ひくひく動いてるよ」

亜美の周りでノートを持ち、熱心に観察している『生徒』が言葉を放つたび、ソクリ……と亜美の羞恥心がかきたてられる。

くばあ……と自ら秘所を押し開き、シヤーペンで各部位の位置を説明していく。

「……ここがクリ……トリスというところ……あうっ！」
赤く尖った部分の説明をしようとしたとき、ツン……ッと

シヤーペンの先端がその部位に当たり、急な刺激に思わず声をあげる。

（成績トップの私がこんな……）

自分ではどうしようもない羞恥心が全身を包み信じられないほど体は熱くなっていた。



恥辱もまみれながらも、亜美は諦めてはいなかった。
（なんとか生徒のみんなを正気にさせなきゃ……）
「べたん、と床に膝を付き、みんなに向かって言う。
「みんな……さっきから股間を硬くして苦しそう……
いいわ……わ……私の手を使って楽にしてあげる……」
「ほほう？いい心がけた……負けを認めたのかな？マーキョリー」
突然の亜美の行為に妖魔が驚く。しかし亜美には考えがあった。
（みんなをおかしくしているのはこの部屋に満ちた性欲の瘴気……
だったら射精してしまえば残るのは脱力感だけのはず……）
「あ……亜美ちゃんお願い！」「お……俺も！」
部屋中の生徒が亜美の回りに集まり、奉仕が始まった。

はあ

はあ

しゅっ

しゅっ

まぢ

しゅっ
しゅっ

「こんなに張れ上がって……苦しそう……」が気持ちいいのっ」
亜美の柔らかな指が、時にはカリを刺激し、時には袋を「ねくり
回し、生徒達を絶頂へと引き連れていく。
「はうっ……イクよ亜美ちゃん！」「うあっ……っちも出るっ……」
生徒達の肉棒が次々と痙攣していく。
「ふふ……っ　いいのよ……っはい出して、楽になれるから……」
「ジュジュッ……ジュルルッ……」
「一斉に白い粘着液がマーキョリーの衣装を汚していく。
（これで……みんなの洗脳が解けるわ！）
完全にそう思っていた……しかし射精したはずの肉棒はまた
むくむくとそそり立ってゆく。
「そ……そんな……」
努力の甲斐虚しく、目の前には再び元気を取り戻した肉の
群れが立っていた。



「ハハハッ！ 妖魔の術がそんなにたやすく敗れると思うなっ！ さあ、今度はその体でみんなの欲求を満たしておやりっ！」
作戦に失敗した亜美には、もう妖魔のいいなりになる以外
選択肢は残されていないかった。

「あ、亜美ちゃんもう我慢できないよおおっ」

生徒の一人が亜美を机に押し倒し、淡く潤った秘所に己の分身を
押し付ける。

「い、いやああっ！ やめてっ！ 私はみんなを助けに……」

亜美の説得とは逆に、体はズブズブ……と肉棒を受け入れていく。

「ずん……キユウキユウ締め付けてくるっ……亜美ちゃんのお〇んこも
ビクビク動いてるよっ……」

はぁ

はぁ

パンッ

パンッ

くっく

くっく

「あっ！ あん！ あん！ はあ……そんなこと言わないでえっ」
壊れたおもちゃのように腰を動かす生徒の力が
奥の肉と接触する度、嫌でも苦悶の声を上げて
しまう。そして頭の良い亜美には、こんな状況で感じて
しまっている自分に気づいていた。
「こんな……大勢の前で犯されるなんて……」
思わず涙が出てきてしまう。
周りで我慢できずに自慰をしている生徒達も
ゴクリと唾を飲み、自分の番を今か今かと待ち望んでいる。
「くっく……」ビュルッ！ ビュー！ ビュッ！ 自らの肉に熱いものを
感じ、終わりを安堵する亜美。しかしそれは次の陵辱の始まり
でもあった。





もう何度目の射精と絶頂だろうか。
亜美の秘所はパンパンに膨れ上がり
白い白濁液が滴り落ちている。

「はあああ……また……硬いのはいつてくるうっ」
一度強がることを放棄した精神は脆く崩れ落ち、
今では自ら快楽をむさぼっている。
ズリユツズリユツ

「あはっ……あーそ……そ……いいいい」
「またいつちゃうっ？ イっていいよ亜美ちゃん！」
「イク……またイク……あああああっ！」
ぶるぶるっといやらしい全身を痙攣させ、亜美は何度目かわからない高みへと上りつめていった。



セ〇ラームーン う〇ぎ・〇美



い、いやあつ！
やめてっ…！
私はみんなを助けに…！



だ・だめ、だめええ！
お願い、中じほ…！
だめえっ！

妖魔の手に堕ちた二人…



Rip Lip
成人向け